

## 教師の役割を問いつづける

### 1. 教育を考える一言

「人間が生きものの生き死にを自由にしようなんておこがましいとは思わんかね」

### 2. 背景

この言葉に初めて出会ったのは、小学生のときです。学校の図書館に所蔵されており、全部で 20 巻以上もありましたが、そのなかで最も印象に残っているのが、医師である本間丈太郎によって発せられた上記の言葉です。

主人公のブラック・ジャックは幼少期、爆発事故によって瀕死の重傷を負い、本間丈太郎医師の懸命な処置により、ブラック・ジャックはなんとか一命を取りとめました。手術は無事に成功したように思われましたが、このとき、本間医師はブラック・ジャックの体内にメスを置き忘れていたのです。手術後の経過を見ると口実で、再びブラック・ジャックの体にメスを入れると、彼の体内からはカルシウムの殻で包まれたメスがでてきました。彼の体は、医学的には説明できない方法で、彼の命を守ったのです。本間医師は、このことがきっかけで、生命の不思議さと医学の難しさを痛感しました。彼は臨終の間際にこの事実をブラック・ジャックに伝え、息を引き取ります。

### 3. 考察

教師の役割について考えるとき、子どもに対して何かを「教える」ということが、本当に正しいことなのだろうかと考えてしまいます。もちろん、大人の方が子どもより知識や経験をもっています。新しい知見を与えたり、間違った行いを正したりすることは学校における教師の重要な仕事だと思います。しかし、教師が子どもを「教育」するとき、子どもの成長に関わることへの一種の畏敬の念や、謙遜を抱くことが必要ではないでしょうか。また、子どもは、大人の意図を超える成長をする存在としてとらえる視点が大切です。

そのように考えると、私にとっては教師という職業それ自体がジレンマなのです。自身の働きかけが子どもにとってよいものになってほしいと思う反面、本当によいものを提供するのだろうかという疑問が、常に内在し、葛藤します。効力感をもって教師をやりたい、けれど、そうすることで「教える」ことのおこがましさに苦悶します。教師の役割とは、いったい何なのでしょう。教師を目指す身として、問い続けなければならない課題です。

#### 文献情報

手塚治虫『ブラック・ジャック』第 3 巻, p.170、秋田書店、1974 年

